



県中いわて

令和5年12月1日 / 第261号

- 発行 / 岩手県中学校長会 ●代表 / 中屋 豊 (盛岡市立厨川中学校) ●事務局 / 〒020-0885 盛岡市紺屋町2-9 (盛岡市勤労福祉会館2F) / 電話・FAX 019(622)0572 ●ホームページ <https://www.iwate-jh-kochokai.jp/>
- 印刷 / 杜陵高速印刷 / 電話019(651)2110

第74回全日本中学校長会研究協議会大分大会

《大会主題》

「新たな時代を切り拓き、よりよい社会を形成していく日本人を育てる中学校教育」

第74回全日本中学校長会研究協議会大分大会が10月26日(木)・27日(金)の2日間、大分県別府市のビーコンプラザ及び松乃井ホテルを会場に行われました。全国各地から1,838名の中学校長が参加、岩手県からは23名が参加しました。

1日目の開会式で、齊藤正富大会会長は、中央教育審議会からの「令和の日本型学校教育」、現行の学習指導要領の完全実施、「個別最適な学びと協働的な学び」「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた取組の展開、GIGAスクール構想の下「一人一台端末」を活用する指導方法の改善を進めてきたことについて触れ、コロナ禍以前のやり方に戻すのではなく、新たな教育活動の構築を念頭に生徒の「学びの保障」を実践していくことが重要であると述べました。また、全日本中学校長会として、関係諸機関との連携を図り、校長の知恵と情熱を結集することが大事であることにも触れておりました。そして、山本豊実行委員長は、4年ぶりの参集形式での大会開催であり、「全日中新教育ビジョン」の趣旨を踏まえた8分科会研究題に迫る各地域や学校における成功事例、先進的事例を共有できることは有意義であると述べました。開会式後、安彦広斉文部科学省大臣官房審議官から「当面する初等中等教育上の諸課題」と題して説明がなされました。

全体協議会では、全日本中学校長会から部活動地域移行に向けた取組、京都府から主体的に言語・テキストを使いこなす生徒の育成に向けた取組の提案

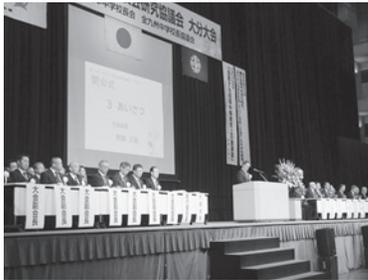
がありました。

午後からの分科会報告は8つの研究協議題に分かれ、各々の分科会で2つの研究提案にもとづき、協議や情報交換が行われました。それぞれ、限られた時間ではありましたが充実した分科会でした。

2日目は日本文理大学チアリーディング部BRAVESによるアトラクションでスタートしました。学生によるアクロバティックな組み体操など、参加者を魅了しました。

その後は、フリーアナウンサーで元NHKアナウンサーの工藤三郎氏による「スポーツ実況47年～感動を伝えること～」と題して記念講演が行われました。ご自身がNHK時代のスポーツ実況放送で発した言葉を当時の映像を用いて解説しておりました。

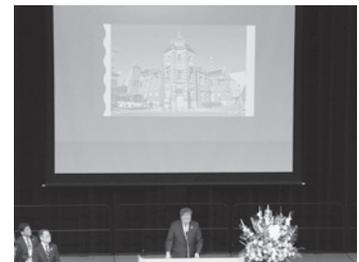
閉会式では、次期開催地である中屋豊岩手県中学校長会長の紹介を含めた挨拶の後、岩手県参加者全員が「おでんせ！いわて」の手作りの旗を振って歓迎する気持ちを伝えました。



開会式 齊藤正富大会会長 挨拶



講演講師 工藤三郎氏



閉会式 中屋豊次期開催地代表 挨拶



次期開催地からの歓迎

(被災地支援) 横軸連携活動 ～田老一中との交流をとおして～

令和5年9月14日。田老第一中学校第2学年の皆さんが、横軸連携活動として城西中学校を訪問してください、本校第2学年と交流学习を行いました。

本校生徒は、昨年度、宮古市田老地区を訪問し、地域の皆さんの協力をいただきながら、東日本大震災の被害や避難所における生活の様子、復興状況や地域の皆さんの思いなどを学び、また、心に深く感じるものがありました。そこで、生徒は今回の交流学习を大変意義のあることとして受け止め、心待ちにしていました。



＜城西中生徒による歓迎の合唱＞

はじめに、防災学習の交流を行いました。田老一中による「田老を語り伝える会」では、今回、保護者からの聞き取りが紹介されました。東日本大震災当時まだ1歳ほどであった生徒の皆さんを、ご家族が大切に守り育ててくださったその思いに触れ、会場は感動に包まれました。また、生徒の皆さんの防災に対する高い意識や、地域を大切にしたいという熱い思いが伝わる素晴らしい表現活動に心打たれました。続いて城西中学校からは、学校紹介の後、昨年度の田老訪問学習等について発表を行いました。



＜表現活動「田老を語り伝える会」＞

次に、両校の生徒を3分科会（9グループ）に分けてワークショップを行いました。



＜真剣に話し合う田老一中、城西中の生徒＞



＜「自分たちに何ができるか？」意見を交流中＞

分科会のテーマは、「A 命を守るために地域に伝わる伝統や知恵、構造物、起こりうる災害は何か」「B 災害発生後、3日間生き抜くためにすべきことは何か」「C 被災地域やその地域の人のために自分たちができることは何か」の3つです。一人一人が自分の考えを付箋に書いた後、発表しながら用紙に貼り、互いに質問したり、意見や感想を述べ合ったりして、自然災害に対する備えや、命を守る行動の具体を確認することができました。

東日本大震災から10年以上の年月が流れましたが、今回の交流学习をとおして、生命の尊さ、人と人とのつながり、郷土や地域を大切に思う心など、生徒の心に深く刻まれたことと思います。また、教職員の私たちにとっても、「いわての復興教育」にひたむきに取り組む使命と責任を、改めて強く感じた貴重な機会となりました。

部活動地域移行

「部活動地域移行の取組」

気仙地区 佐藤 学（東朋中）



令和5年10月30日(月)夕方6時半から、今年度2回目の「大船渡市立中学校部活動の在り方に関する検討委員会」が開催された。市教育委員会が主催する会議であり、様々な立場の方々総勢約20名が出席した。内容は、「地域スポーツクラブ活動体制整備事業」の中間報告と、令和6年度以降の部活動地域移行に係る取組方針(案)についての協議であった。およそ3時間に渡って市教育委員会による説明とそれに係る質疑が続いたが、誰一人納得した表情の人はいなかった。スポーツ庁や文化庁が示している「地域の子供たちは、学校を含めた地域で育てる。」という理念のもと、地域の実情に応じてスポーツ・文化芸術活動の最適化を図り、体験格差を解消するための環境を創っていくという方向性については皆理解し参加しているものの、大船渡市として具体的にどこを目指していくのかというゴールが示されることなく曖昧な議論が繰り返されるばかりだった。地域移行とか地域連携と言われても何をどんなステップで準備をしていけばよいのか誰もイメージすることができずにいた。「次回の会議は2月中旬になります。」という主催者の言葉で締め括られ、空虚な雰囲気のまま会議が終了されるのかと思った矢先、ある学校のPTA会長さんからこんな言葉が出た。「もっともっと議論をしましょうよ。あと1回の会議だけでは無理でしょ。私は何回でも出席しますよ。2月では遅い。11月、12月の2カ月でみんなにしっかりと説明できるまで何回でもやりましょう。」と。

会場の雰囲気がこの一言で一転し、「国や県の方針を待つのではなく、大船渡モデルを創ろう。」とか、「競技協会やスポ少団体、学校や行政、それぞれの立場でやれることや役割を明確にしよう。」と、次々に前向きな意見が噴出した。「これはいけるかも」と感じた参加者は、私だけではなかったはずであり、とても心強く感じた。

大船渡市では、昨年度県の委託を受けて「地域部

活動推進実践研究事業」として、大船渡市スポーツ協会が運営主体となって1年間先進的に取り組んだ経緯があり、一定の成果と課題が明らかになった。それでも、市内4校の中学校における部活動の実態は様々であることから、地域移行・地域連携に向けた課題は依然として複雑である。更には、令和7年度には大船渡中と末崎中の統合も予定されており、市内全ての中学校の学区が広域化し、スクールバスで通学する生徒数がどんどん増加していくことが想定される。このような状況下において、現在でも親の経済的負担増の問題、送迎の問題、指導者確保・育成の問題、活動場所・施設確保の問題はどの学校でも大きくのしかかっている。また、生徒数の激減や部活動の任意加入制による学校部活動への加入生徒の減少によって、数年後には現在の枠組みでの部活動存続が不可能になる中学校がほとんどである。また、国では休日からの段階的な地域移行を提唱しているが、平日と休日の運営主体を分けて活動するメリットについても疑問の部分が多いと感じている。

日本全国で同じような状況に頭を抱えている自治体が多い中、静岡県掛川市では、2026年の夏までに、中学校の部活動を完全に廃止することを決めている。学校と切り離された団体が運営する「地域クラブ」への移行を決め、既にスポーツから文化まで市が公認する18の地域クラブが活動を始めているという。私個人としては、これは見事な英断であり、これまで長年行われてきた「中学校の部活動」をどうしたらいいか?という固定観念を拭ききれない中では、掛川市のような大胆なゴール設定は出てこないのではないだろうか。

今日の前にいる子どもたち、そしてこれから入学してくる子どもたちの中学校3年間の生活、その先の進路や子どもたちのニーズ、子どもたちを支えなければならない家族の生活のことなどを考えると、とても小手先のルールを変えるだけで収まりきれないものではない。「子どもたちのために」を合言葉に、行政、学校、地域のいろんな立場の大人達が本気になって議論を重ねて可能性を探り出し、明確なゴールを見出さないといけない段階だと思う。誰かがやってくれるのを待っていても進まない。私も校長として覚悟を決め、学校の役割を考えていきたい。

私の学校経営

「乙部中成长の5項目」

盛岡地区 小石 孝紀 (乙部中)



本校は、「乙部中成长の5項目」の育成を柱にして、教育活動を行っています。「成長の5項目」とは、生徒の自己有用感や将来にわたって生きて働く力の源となるであろう「主体性、社会性、親和性、忍耐力、自尊心」の5つの力や心を高めることです。この力や心を育成するために日常の教育活動の一つ一つと結び付けて、生徒に意識させて、活動に取り組ませていくことを大切にしています。

本校の特色ある教育活動として、地域、家庭と連携し、年間を通して、「郷土芸能活動」に全校生徒が取り組んでいます。全校生徒が、乙部地区に伝わる7つの郷土芸能団体に分かれ、保存会の方々のご指導をいただきながら、「総合的な学習の時間」を中心に先人の心に迫るべく踊りや演奏に磨きをかけています。そして、7月に地域や家庭の方々をお招きして、「郷土芸能発表会」を実

施しています。

今年度、特に大切に取り組んだのは、生徒の「主体性」や「親和性」を高めるために3年生が中心となって、国語の時間にそれぞれの踊りの由来、踊りに込められた先人たちの思い、踊りや演奏の形態などを自分たちで調べ、プレゼンし合ったことです。その後、3年生が1・2年生にその内容を全校向けにプレゼンし、1・2年生は振り返りを細やかに行いました。このように、「事前・事中・事後」の取組を充実させることで、生徒が主体的に見通しをもって、郷土芸能に取り組むことができたと思います。今年の「郷土芸能発表会」は、大盛況でした。2学期には、郷土芸能発表会やこれまでの取組の振り返りを全校集会で共有化したことで、取組の価値を再確認できました。

校長として、「成長の5項目」を育成していくために、様々な教育活動でどのような事前の意識付けや事後の振り返りを大切にしていくのか意識し、青写真をもつようにしています。そして、これからも、職員のアイデアを尊重し、背中を押ししたり、職員が悩んでいる時には、相談にのったり、アドバイスをしたりすることを心掛けていきたいです。

私の学校経営

個性を大切に個性を伸ばすために

岩手地区 長島香乃子 (沼宮内中)



私は「生徒の生命を大切にしたい学校経営を行いたい」と考えています。

そのために、生徒一人一人の「個性を大切に個性を伸ばすこと」を経営の重点にしています。

具体的には、「全教職員に生徒指導提要（令和4年12月版）を配付し、それを使った教職員研修会を毎月開催する」「きまりの見直しを図るよう、生徒会に働きかける」「制服の他に生徒が選択して着用できる指定服を導入する」「部活動を地域クラブにすることで放課後の時間の有効活用につなげる」「生徒の心身の不調等に素早く対応できるよう、毎朝、生徒情報の交換を行う」「生徒の個性の理解のために、全校生徒と個別面談をする」等を行っています。

生徒指導提要を使った研修会では、短時間で

あっても必ず感想のシェアリングを行うため、教職員もお互いの個性を知る機会になっています。また、経験の積んだ教員にとっては、生徒指導の学び直しの機会となり、全教職員が生徒指導の在り方を確認しながら生徒一人一人を大切にしようとする思いを共有できる時間となっています。

きまりの見直しについては、話し合いを通して生徒の自己指導能力の育成につなげたいと思い、生徒総会等での話し合いを繰り返しているところです。

今年度になって推し進めた、部活動の地域移行については、ほとんどの部活動が地域クラブとしての活動を行えそうなどころまで、体制が整いつつあります。もともとクラブチーム等に所属していた生徒も競技に集中しやすい環境となり、女子サッカー・硬式テニス・ラグビー・書道など、部活動にはなかった活動での活躍も増えました。そして何よりも、教職員の負担は格段に減りました。

これからも、生徒一人一人が自分の個性を發揮し、活力に満ちた学校生活を送ることができるよう、生徒や教職員の声に耳を傾けながら、生徒や教職員を大切にしたい学校経営を行いたいと思います。

各地区校長会活動 NOW

一関地方校長会



「ONE TEAM」 ～一関地方フィフティーン の結束～

菊池 弘明（千厩中）

1 はじめに

一関地方校長会中学校部会は、昨年度末の学校統合により2校減り、一関市14校、平泉町1校の計15校で構成されています。一関地方の多くの中学校は、生徒数の減少による学校改革を迫られているところです。4月に3名の新入会員を迎え、各校が抱える教育課題と対応策を共有し、協議を深め、自校の学校経営の充実を目指して活動しています。

2 本年度の活動方針

- (1) 校長としての資質を高め、家庭、地域からの信頼のもとに、特色ある学校経営に努める。
- (2) 会員相互が情報や資料提供を行い、現状や

課題を的確に把握する。

- (3) 部活動の在り方、働き方改革等について積極的な情報交換と改善に努める。

3 本年度の活動内容

- (1) 学校経営の充実に資する研修会 年5回（一関市博物館での地域理解研修を含む）
- (2) 上級学校の特色を理解するための、一関地方中・高・特支・高専校長連絡会研修会の実施
- (3) 「学校不適応の改善に向けた組織的対応の在り方」を研究主題にした研究推進
- (4) 地域部活動への移行推進に向けた情報交換

4 おわりに

新型コロナが5類に移行した中で、各校では、学校行事の実施等で新たな判断を必要とする1年を過ごしていますが、ここでも、会員相互の情報交換・意見交換が各校の学校経営に活かされていると感じます。「一関地方の子どもたちのよりよい未来を創造するための資質・能力を育てる」ことを第一に、全員が同じ目標に向かって1つになろう、みんなで1つのチームにまとまって進もう！「ONE TEAM」。

釜石地区校長会



「ONE TEAMの釜石地区 中学校長会を目指して」

八木 稔和（唐丹中）

1 はじめに

釜石地区校長会中学校部会は、釜石市5校、大槌町2校（内、義務教育学校1校）の計7校で構成される。常に情報共有と相互理解に努めながら、7人の校長・学園長でスクラムを組み、本音で語り、学び、高め合える、ONE TEAMの釜石地区中学校長会を目指して活動している。

2 本年度の活動方針

- (1) 国や県の教育施策を注視し、特色ある教育活動の実施と復興教育の更なる充実を目指し、学校間の連携を深め、関係機関の支援をいただきながら学校経営の充実を図る。
- (2) 職責の重さを自覚し、識見、力量を高めるとともに研究・実践活動の充実を図る。
- (3) 会員相互の連携と親睦を深め、組織を強化するとともに事業を円滑に運営する。

3 本年度の活動内容

- (1) 学校経営研究会の実施
年10回、輪番制で各校を会場にして行って

いる。関係団体等からの報告の他、学校経営上の諸課題への対応について研究・協議している。また、日常の悩みなども含めた情報交換を行い、本音で語れる貴重な場となっている。9月には、小学校長会との合同経営研究会を開催し、中学校部会から学校経営について発表する機会を設けた。

(2) 中・高校長等連絡協議会の実施

年2回、中学校、高校、特別支援学校を会場に行っている。中・高の各学校の学校経営や生徒の状況、高校一日体験入学の成果や課題等について協議し、相互の意見を交わしている。中高の連携を図る上で重要な場となっている。

(3) 釜石警察署と連携した研修会の実施

学校経営研究会の研修に位置付け、毎年、釜石警察署の生活安全課に生徒指導に関わる講話を依頼している。今年度は情報モラルに特化しての内容で行った。警察との協力体制、連携を深めるための良い機会となっている。

4 おわりに

様々な地区内の課題や各学校の抱える問題等について忌憚なく意見を交流し合いながら地区内同一步調で対応するよう努めている。生徒・保護者・地域の期待に応えるために、今後更に釜石地区7校の結束力を高め、活動していきたい。

「令和4年度における生徒指導の諸課題に係る調査」の概要

会員の皆様のご協力と生徒指導部各地区担当者の皆様、幹事の皆様のご協力により、令和4年度分調査の『結果と傾向』をまとめることができました。心から感謝申し上げます。

9月4日には第2回地区担当者会議、小・中学校長会生徒指導情報交換会を開催し、概要を報告いたしました。以下、調査結果の概要をご紹介します。

1 各学校の生徒指導の状況

令和4年度に「問題行動がなかった」と回答した学校は57%（83校）前年度（52%・76校）と微増しました。「問題行動が3件以上あった」と回答した学校が24%（35校）前年度（23%・34）で、昨年度とほぼ変わらない結果でした。

2 対教師・対生徒への問題行動

令和4年度の「対教師への問題行動」は62人で昨年度（26人）から2倍以上の増加。さらに教師に対する暴言については昨年度の15件に対して今年度は275件と大幅に増加しました。また、「対生徒への問題行動」も、432人で昨年度（346人）から約1.24倍増加しました。特に「嫌がらせ・いじめ」は257件で昨年度（159件）から約1.6倍増加しました。

3 怠学等の問題行動

令和2年度より増加傾向となっている問題行動の生徒数は101人と昨年度比22件の減少。ただし、施設、設備へのいたづらや破壊などの器物破損は45人と昨年度の21人から倍増しました。学校生活の中で指導にあたった教師との衝突からの反抗的行為として、いわゆる「物にあたる」行為が増加したものとされます。

4 いじめ問題の状況

令和4年度のいじめの認知総数は1,087件。昨年度より33件の減。学年別では過去3年間と同様の傾向が見られ、学年が上がるにつれて解決率は低くなる傾向にあります。ただし、解決率はもっとも低い3年生でも9割を超えていて、先生方の解決に向けた努力の跡がうかがえる結果となっています。

いじめの様態は、例年同様「ひやかし、からかい」が最も多い結果となりました。「暴力」はR3年度の69校⇒43校の減で、件数も21件の減でした。

いじめに対して効果的だった指導については「学級集団作りや生徒同士の人間関係の構築、教師と生徒の人間関係の育成など、生徒と教師の人間関係づくりが、いじめの減少に向けて効果的であることが改めて再認識される結果となりました。

5 不登校の状況

不登校生徒数は1,388名で、（昨年度1,186名）から約1.17倍の増（月7日以上欠席の生徒）。全生徒数に占める出現率は4.91%（昨年度3.98%）と県内中

学生の約20人に1人が不登校といった由々しき事態となりました。最も多い理由は例年同様に「神経症的な拒否」で、次いで「学校生活に意義を感じない」が不登校の理由として上位に上げられています。

6 情報機器の利用

令和4年度の携帯電話・スマホの利用によるトラブルは依然として多く、問題行動として対応にあたる生徒指導事案のほぼ全てにおいて、スマホ利用によるトラブルが起因となった、あるいは、スマホ利用によってますます状況が悪化する事態を招いています。

本県で特に多いトラブルとして、「ネット依存」（46.6%）、「ネットの書き込み」（48.6%）、「LINEに関するトラブル」（52.1%）の三つがあげられました。

また、「携帯電話の校内持ち込み禁止」について、県内中学校では校内持ち込み禁止の割合が97.9%⇒94.5%に変化しました。今後、何らかの条件付きで持ち込みを容認する学校が増えることが予想されます。結果、それを「認める学校」「認めない学校」によって「指導の差」が出ることにより、このことが問題となる可能性は容易に予測できます。携帯電話の持ち込みについては、全国的に「容認」「一部容認」の方向で進んでいることから、情報の推移に敏感になりながら、共有、及び校長会としての方向性を検討し、県教育委員会・教育事務所・地元教育委員会が連携した上での方針作りが必要であると思われれます。

7 児童虐待・クレーマー等

前年度と比較して増加傾向にあり、その中でも特に懸念されるのは、クレーマー（モンスターペアレント含む）への対応、または虐待が疑われる事案への対応の2項目です。どちらも毎年増加傾向にあります。これらについては、教師が受け持ちの生徒に対する生徒指導に従事することよりも、保護者対応のほうが教員が負担を感じる業務になりつつあります。学校としては保護者の要求が「我が子が今後、事案の発生以前よりも学校生活を有意義に送るため」のものなのか、あるいは「該当家庭の利己的な指導方針の押し付け」によるものや、生徒指導からは逸脱した「申し出た要望を履行してくれないことによる不平・不満」なのかを見極めて対応すること、またその問題については学校だけではなく、地元教育委員会と管轄教育事務所との情報共有からの同一歩調での対応も不可欠であると考えます。

虐待等については、該当生徒に関わる教師集団による日々の観察と、疑わしきものは「躊躇せずに関係機関に報告すること」の徹底が必要です。

県中体連の活動

岩手県中学校体育連盟 会長 橋場 中士（下小路中）



昨年来、国が進める「運動部活動の地域移行」の取組に伴い、本連盟の長きにわたる歩みの中で最も大きな転換期を迎えています。「大会等の在り方の見直し」が求められ、昨年度2月第2回評議員会において一定の基準を満たすスポーツ団体等の参加を認めるとし、その後、9競技21団体を承認しました。

第70回となる今年の県中総体は、13市町村を会場として7月15日～17日を主会期に学校数144校、地域スポーツ団体10チーム、計6,315名が参加しました。5月の新型コロナウイルス感染症5類移行に伴い、同意書や体調チェックシートの提出を求めないなどコロナ禍以前の運営に戻し、会場では以前のように声援や歓声が響き渡りました。中央開会式は純情産地いわてトラフィールにて行う予定でしたが、災害級の大雨予想が報じられ前日判断にて開催を見送りました。会期中雨天が続き各専門部にはご苦労をおかけしましたが、競技時間の変更や延期などの適切な判断のもとに運営がなされ、無事大会を終えられ感謝するところです。また、本県では東北大会5競技を開催し、本県全体の成績は団体個人30種目の優勝となりました。

四国全国大会では、準優勝に陸上男子1500M高橋陽さん（胆沢）、ホッケー男子の岩手U15ホッケークラブ、第4位に陸上男子走高跳松尾渚生さん（見前南）、水泳男子自由形1500M瀧澤裕成さん（桜町）、第5位にバスケットボール女子盛岡白百合学園、ハンドボール女子矢巾、ホッケー女子

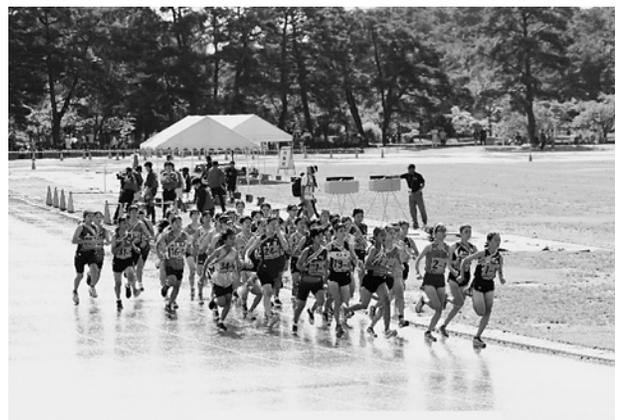


バスケットボール女子
盛岡白百合学園



ハンドボール男子 矢巾中

となりました。本人の努力とともに、顧問やコーチ、競技団体や県競技専門部の指導強化の賜物であり、そのご尽力に敬意を表するものです。今後開催される全国駅伝大会や冬季競技の活躍も大いに期待しています。



岩手県中学校駅伝大会

終わりに、部活動の地域移行を見据えた引き続きの対応や異常気象による熱中症対策とともに、少子化に伴う運営の困難さなど課題が山積しています。今後も、県中学校長会や各地区中体連などの密なる連携を大切に、望ましい在り方等についての検討を進めていくとともに、たくましく人間性豊かな中学生の育成にもしっかりと取り組んでいきます。

令和5年度の岩手県中学校総合文化祭を通して

岩手県中学校文化連盟 会長 泉澤 毅（下橋中）



岩手県中学校文化連盟は、今年度設立22年目を迎えました。今年度の総合文化祭のテーマを『繋ぐ』とし、今まで中文連が培ってきた歩みと、県内各地区との繋がり、さらには各地域においても脈々と育んでいる独自の芸能文化活動の歴史と各学校文化との繋がりなど、縦と横の繋がりをあらためて確認したいと考え、設定いたしました。

舞台部門においては、ここ数年、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、観客数等を制限して総文祭を開催して参りましたが、今年はその制限もなくなり、多くの来賓の方々にもご来場いただくとともに、特別支援学校や会場周辺の小学生の皆様にも観覧いただき、開催することができると喜んでいました。しかし、県内におけるインフルエンザの流行により、出演を予定していた学校2校が映像出演となってしまい、誠に残念な気持ちでおりますが、それ以上に出演することとなっていた中学生にとってはもっと残念な気持ちでいっぱいであったろうと推察されてなりません。地区代表の出演校は輪番制を取っていることが多く、その時に中学生でなければ、総文祭のステージに立つことはできません。そのような貴重なめぐり合わせ機会が、不可抗力で奪われてしまったのですから。出演していれば、必ずや称賛の拍手をもらっていたことと思われまます。

次に、展示部門では今回、特別に追悼展示を行いました。その展示は、第1回総文祭に出品された番



田雄太（当時：松園養護学校中等部2年）さんの書道作品です。番田さんは幼い頃に事故に遭ったため手が不自由であり、筆を口にくわえて書いていた作品です。今回は、第1回総文祭に出品した作品と、文部科学大臣奨励賞を受賞した作品を展示いたしました。学校卒業後もパソコンを操作し分身ロボットの開発に貢献するなど、仕事にも就いていましたが、2017年9月、その短い28年の生涯を閉じました。今回、縁あって番田さんの書道作品を展示することを通して、あらためて第1回があるからこそ、今の中文連があることが認識させられました。

今年度の全国中学校総合文化祭沖縄大会には葛巻町立葛巻中学校の「葛巻神楽」が出演した。出演が決まってから聞いたことだが、葛巻町は沖縄県北中城村と交流があり今回も北中城村を訪れています。そのような文化の交流は、本県の文化活動にとって、多くの刺激となります。来年度の山口大会には、住田町立世田米中学校の「大正琴」が出演することとなりました。このように県内のみならず、他の都道府県とも、文化の交流が深まっていくことを本連盟としても期待しています。

令和5年度第22回県中学校総合文化祭

舞台部門：出演中学生数 1,659名

展示部門：出展作品数 2,122作品